



Title	幻の健康福祉館 : 万国博健康福祉展示裏ばなし
Author(s)	吉田, 寿三郎
Citation	大阪公衆衛生. 1969, 23, p. 13-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

幻の健康福祉館

—万国博健康福祉展示裏ばなし—

吉田寿三郎



さる9月26日大阪府医師会館にて万博テーマ館世界セクション健康展示推進協力会なる長い名前の会が発足した。園田元厚生大臣を会長に中村大阪府医師会長、鈴木府衛生部長、中山

市衛生局長、古野府立公衆衛生研究所長、吉田国立大阪病院長、それにわたくしが発起人となった。世界セクションの展示強化のため約2000万円の浄財を仰ぐためである。

長い苦闘を脇から見守ってきた藤井府医師会事務局長はこれだけのメンバーが約束すれば、もう資金集めは磐石であると心から喜んでくれたが、いろいろ苦戦してきた末のことなのでやはりいちまつの不安は残っている。

わたくしたちが健康福祉に関し、万博でなにがしかの展示をしなければならない、という使命感をもって、一昨年の7月以来綴り綴ってきた願いがようやくこの世界セクションに、小粒ではあるが、花を開こうとしている。曲りなりにも健康福祉の現代の中心課題を凝結できることは多くの方々のご好意と励ましがあつてのことである。過ぎこしを少々ここに回顧してみる。

◇…日本 WHO 協会の発足…◇

数年前には夢にも考えてもみなかった方法に関心をもち、やがて全力を挙げて考えかつ努力するようになぜなかったか、をまず紹介すべきであろう。

日本WHO協会が40年4月25日に社團法人として、京都に本部をおき、発足した。国際機関が東京に蟠集する傾向のなかで、この協会が文化都市とはいへ京都に本拠をおくことになったのには、多少のいわくいんねんがあった。役員も関西の財界ないし圭刀界などの方が多い。東京方面からの理事は今日武見太郎医師会長、黒川武雄元厚生大臣、ただ今は両棲族になったわたくしまで加えても関東勢は4～5名である。

事務的には協会が東京におかれる方が便利であると

だれもが思うであろう。しかし、日本におけるWHO協会運動の経過からみて、関西におかれても不思議でない理由はある。ただし、この説明は省きたい。

とにかく京都に位置したからといって、WHO協会が果さなければならない役割はもちろん変りのあろうはずがない。健康を通じて世界の平和に寄与する運動に協力することが使命である。しかし、置れた環境から、東京における事務的な便宜を犠牲にすることを埋合わせ、より大きな寄与をしなければならないことであろう。他面、創立まもない協会が財政的に困難のあることは覚悟の上で仕事を考えなければならないことはいうまでもないことである。

自然、協会としては、真の健康福祉がよって来るところを深く掘り下げ、また広く総合していくような協同研究を上述の主旨にみあう有為な課題として採り上げることになった。京都は理念の育つ土地柄である。

◇…万国博こそ天恵のとき…◇

人口の推移、産業の高度化、原子力、オートメ化、地域差などに関連して、日本においてまた世界において、WHOの定義する広義の健康観からして、捨てておくことのできない問題が今日山積している。これらは医師や社会事業家また厚生省や労働省のような狭い領域のみでは積極的な対応ができないほど多岐にわたる解析的、多面を蔽う総合的計画を必要とし、これを貫く原理を欠くことができない。

この課題を諸官庁や諸団体に研究しプロセクトするとなると、知能と機能とはとにかくとして、どうしてもセクト主義に煩わされて成功覚束ない。そして、世界的視野から広く健康問題を取扱う使命をもつWHO協会がこの種の研究を担うことがうってつけであり、誕生まもなく腐れ縁のないこともえがたい好条件であろうと考えた。

ただこのような研究は茫漠とした無限の彼方に目標をおくことは許されず、またこれでは息切のする恐れがある。という観点に立つと、'70年に文化のオリンピックである万博が日本で行なわれることはまさに天

恵であると思わなければならない、と思い至った。

というのは、これは国民の一大事業であり、やがては一大関心事であって、100年の夢を描く自由さをもっている。この方法の期日を一応の目標において、その遅しき、大らかさを精神とすれば、上記の事態に対応する研究のグループを育成可能であろうと考えたわけである。もちろん、万博に直接参画しようなどとは夢想だにしておらず、もっぱら一大国民行事の副産物として研究会を育てることのみ望んでいた。

このような理由で、WHO協会はかなり早くから万国博について研究し、その結果、従来の万博は、人間の能力、ことに科学技術の無限の可能性を強調する、まことに華やかなもので、ときに漸新な建築を競い、また奇を衒ったものであった。けれども、とかく世の中の現象は、繰返えされているうちに、反対の方向に傾いていくものであるが万博にもこのような兆しを窺いとった。

◇…保健福祉館の話は出たが…◇

たまたま日本の万博の主テーマが“人類の進歩と調和、”という矛盾律の理念を内蔵するものであり、正反對の仏教哲理ないし弁証法の理念によって展開されることを要求している。

そこで、従来白人の行ってきた万博が人間の能力のポジティブな面を採り上げ続けてきているが、ネガティブな面、さらにこれら正反對から合まで発展するところの展示を日本の万博の主テーマは指向しているものであるから、かくては、白人の理念を遙かに越える秀逸なものであり、したがって、主テーマの原理に則して展示を展開できれば、大きな成功を収めうるものと十分察せられる。

そして、反を考えるとすれば、有限性、人間性、内省、諦観、健康福祉などにわたる問題を取上げることになる、と考え及んだことであった。

このころ、わたくしは厚生省の大林科学参事官の紹介で、万博協会出展部の末兼氏の来訪をうけた。保健福祉館をつくる相談にのってほしいと申出があった。

このようなことはWHO協会は全く考えておらず、またわたくし個人としては、万博でとりあげる健康福祉は——そのサーバントがとりあげるようなものでなく——実力者である政界、財界、宗教界ないし教育界が推進母体であるような健康福祉館でなければならない、と考えていた。このような理由から折角の申出を断った。

同じころ、厚生省幹部が健康福祉の展示にどの程度

の関心をもっているか、を知ろうとして、技術官局長が主であったが、個人面接をして確かめた。結果は、残念ながら全くあなたまかせの、無気力、無関心そのものであることを知った。政府館ができるので、なにがしか各省割付けがあるはずである。その際にやむをえないから一応の責は塞がなければならないであろう、というような感覚であった。2～3年もさきの



万博に現局長が興味をもっていないのは当然であったかも知れない。役人は夢のないものである。否もてない立場にある、といった方がよいであろう。

万博協会からはなにかと連絡や相談はあったけれども、WHO協会は万博には全く介入の意志はなくすぎて、モントリオール博の開幕を迎えた。わたくしは、以前から関係のあった古河グループなどに、アイデアを堅めないで、モントリオール詣でをすることは全く不利であり、心ない業であるなど話しておったのであったが、いわゆるおえらい方々がモントリオールへ参詣された反響が間もなく、津波のように万博当事者へはねかえってきて、それまでの考え方を根底からゆさぶった。

◇…あまのじゃくの忠告をする…◇

モントリオール博のようにあらねばならない、とする要請が万博協会を狼狽させたわけで、42年6月ごろ、万博協会関係者は反の出展にふみきったカナダ博に振りまわされて悩めいた。松下幸之助が従来の展示を追う日本博への不参加を宣言したとか、三菱グループが手を引くと声明したとか、などまことしやかなデマも流れた。そして、主テーマに忠実であろうとして、イージーな従来の行き方をふむ展示参加者に悩まされつづけた新井前事務総長などは全く気の毒なことであった。

見るに見かねて、わたくしたちは出展部を訪ね、あまのじゃくな忠告に及んだ。つまり、なにもモントリオール博が従来の万博と反対な、人間的な、内省的な

出展をしたからといって、この新しい傾向に従わなければならない、と考えることはおかしい。モントリオールのアイデアを追ってはい、10倍の金と時間をかけても、それ以上のことはできるはずがない、と従来しばしば繰返してきた主張をここで強調した。

そして、日本人はお祭りが好きで上手であるから、これまで準備してきたところは改める必要はなからう。なお、日本の主テーマは合を掲げているが、白人は従来正の万博ばかりしてきており、このままでは合へ行くのは飛躍を感じる。カナダ博が反の万博をしてくれたのはかえって好都合で、これで合の日本博を理解でき、実現できやすくなった。この点をむしろはっきり意識すべきであろう、と主張した。

この時点で、展示部のものは大いにわれわれのかねてからの主張を諒とした。そして、かれらは改めて合の展示としての健康福祉を考えるようになった。

このころ、WHO協会は「万国博に対する思考」をまとめた。これをたたき台にして、9月にはいり「日本万国博に対する要請」を常務理事会が可決した。これをもって、日本生命、関西電力、住友銀行などを説いて、約3〜4億のバビリオンをつくれる可能性を見通していた。

42年9月末の出展締切を目前にしても、展示部には新しい考えも加わり、これを待ち望んでいたにもかかわらず、健康福祉に関する出展はついに一件も申出る団体がなかった。他方、現実には割当てられたら考えよう、という消極的な態度であって、政府館へ厚生省は喰いこめるような生やさしいものではなかった。

◇…建設受入の仮調印に広がる…◇

そこで健康福祉展示を決意し、WHO協会は意のあるところを当時幹事長であった福田赳夫氏にはかった。推挽されて石坂泰三会長に会い、日本WHO協会長の中野剛一郎氏から上記の要請を行なった。それは42年9月27日で万博まであとちょうど900日であった。鈴木事務総長がわざわざ大阪まで出向いて健康福祉館建設受入の仮調印が行なわれたのは898日前の4月29日で、苦を中心にした末広がりに苦笑した。

敷地1,600m²、建築800m²と小粒であるが、ソ連館と米国館を結ぶ線上に会場を予定され、極めて好条件の立地割当に感激した。

このようなわけから、立案者であったわたくしは、おなじく日本WHO協会の常務理事である八杉正文氏と前後して、モントリオール博を視察するように協会の要請をうけた。当時厚生省の身分があったので、この挙について当局とはかく不理解な扱いをしたけれど



も、鈴木事務総長、田中伊佐次、黒木利克先生らのご援助もあり、責任上万難を排して渡米した。

カナダ当局は、健康福祉館をつくることに対し全面的敬意と賛意を払ってくれ、モントリオール博視察の上で心かなる協力をしてくれた。それだけ、日本

という社会レベルの実徳が主テーマの精神とは程遠いとの印象を深くしたことであった。

5日間の短期間であったが、カナダの好意で主要なバビリオンは人気館を含め2〜3回にわたり訪ねて、当方のアイデアが彼に優っておることを確認することができた。また、効果的な演出方法についても立入って研究することもできた。やはり映画手法が適切であり、それも装置でなく内容で勝負すべきである。という結論をもって帰国した。

ところが、渡米中に事情は一変していた。国連館建設の難行から、外務省は、「万博に際しては国連ファミリーは全力をあげて国連館づくりに協力する」という国際的申合せがある、ということをもとにして、きびしくWHO協会に協力方を迫った。外務・通産および文部の3大臣——厚生大臣の出席がないのは不思議である——の説得に、ついにWHO協会長は屈せざるを得なかったとのことである。さっそくその筋は関西の財界にこの次第を伝え、WHO協会への協力は国連館へと振替るよう工作が行なわれた。まさにWHO協会は鴨ねぎの犠牲になったわけであった。

これは42年11月のことで、この時点で独立したバビリオンづくりを一から始めることは全く遅きに失していた。しかし、万国博協会や地元保健福祉関係者の要望もあり、徒労とは知りながら、請われるままに新たな努力を続けた。動力はやはり主テーマの精神から、モントリオール博を継ぐ立場から、健康福祉の展示を欠くことは許されない、と痛感していたからである。なお、国連館に全面協力をせざるを得ないWHO協会をはなれ、有志として微力を尽した。

健康福祉館設営資金を既述のような筋から求めることはもはや無理で、これを業界ないしその他健康福

社関係者に需めるのほか、差し当って考えられるところとなかった。

そこで急ぎ、地元大阪の医歯薬関係、厚生省、それに医師会の3本の柱を建てることに取りかかった。このころようやく厚生省の幹部も理解を示し、ことに事務系局長の協力やアドバイスは有難いと思った。地元の医歯薬師会は大阪のみならず近畿をあげて、健康福祉館建設に関し、石坂万国博会長、左藤府知事、園田厚生大臣などに要望書を提出したし、大阪、京都、兵庫などの府県の衛生当局もこの件について大きな関心を示した。

◇…むなしく日時は経過する…◇

この間、資金源とみる薬業界に働きかけたことはもちろんである。万博展示に少なくとも関西の大所は当初かなりの関心をもっていたという情報にもとづいて、また現在もこれという展示関係のないことから、薬務局長などの意見を聴取しながら、関西薬業協会に話した。まず武田製薬を手はじめに、ことに関西の世話役であった田辺製薬には、東大薬学部長の山田俊一教授の社長紹介にて、総務担当の藤沢重役にあい、この挙の可否について卒直な見解を聞き、なお全く不可能ではないようにうけたまわった。

このような努力の間に知ったことは、薬業界の大所数社は真剣に万博における保健パビリオンの建設を考えていた時があったことである。しばしば打合せ会が行なわれたが、当時厚生省も日本医師会も全く顧みてくれなかった。他方薬業界だけで従来行なった国際展示は大方失敗であった。というようなことから、ついに沙汰止みになり、各社は三々五々した。たとえば、藤沢薬品は三和グループへ、というように…。武田製薬の本多東京支店総務部長などはわたくしたちのパビリオン構想をきいて、これがもう1年前であったならば、早速にも薬業界の協賛で実現していたであろう、と大変残念がられたが、このような後の祭りのよりをもどすことは有志の微力ではできる業でないことを痛感した。

日本の万博はせっかくすぐれた主テーマをもちながら、その主旨に直結する健康福祉館をすら実現できず終ることはかえすがえすも無念であった。もちろん、有志の努力はさらに続けたのであったが、空しく日時は経過した。そして、万博の立柱式も行なわれ、時日は全く逼迫した。

◇…大臣に具申も志したけれど…◇

この43年のある日にかねてから深い理解を示めして下さっていた菅野義丸副会長は、個人的な示唆ではも

ちろんあったが、施設参加で協会があつめる数10億円の中から、厚生大臣を通じて石坂会長に3億円位を健康福祉館のために割愛してもらう交渉をしてみてもどうか、とさえいわれ、知己に感激した。

なんとかして厚生大臣にあい、直接意見具申をすることを志したが、なお厚生省に身分のあったわたくしは当該省の大臣にあうことは容易でなかった。折悪しく議会は予算をめぐる長い長い紛争に終始していたので、大臣に主旨を納得していただけるだけの最小限の時間をつくっていただくことも無理であった。

この目的で、橋渡しをお願いした国会議員は十名余で、小川半次、加藤勘十、松前重義、小宮山重四郎、黒木利克、西村英一、瀬戸山三男、菅野和太郎、宇都宮徳良などの諸先生である。大変好意をもって下さったが、厚生省当局はついにその機会を作りえなかったわけであった。

この間、日本能率協会長の森川覚三先生は健康福祉館設立の趣旨に傾倒され、武見太郎先生を発起人の筆頭にぜひ加えることが募金成功の鍵であるとされた。さきに万博協会が保健福祉館を民間ベースでつくりたいとしていたとき、厚生省に遠慮して、日本医師会に直接呼びかけず、礼を失したように察していた。というのは、以前わたくしが万博について武見先生のお気持ちを聞いたとき、全部を医師会にまかせれば、展示館をつくることにやぶさかでない、といわれたのであったが、この頃の武見先生は万博に関し全く興味を失っておられるように受取れた。このことをもちろん森川先生には率直に話し、武見先生出馬の困難なことを伝えたが、それでも武見先生をということであたられたが、悪い予測が当たって残念ながら不調に終った。

◇…残念／館の建設をあきらめる…◇

またシェルの樹脂部は健康福祉館設立の主旨を高く買い、パビリオン建設用として、エビオキシの大量寄贈を約した。1億以上の高価なものであったが……。ここで大成建設がパビリオンの設計その他について、また東宝映画研究所、NHKが展示について終始好意を寄せられたことを感謝して伝えたい。また、大阪地区の福祉関係者が、個人的集いではあったが、しばしばこの挙に関し励しを下さったことを申添えておく。

最後までねばっていた松下館が43年5月には落着きそうになり、外国から強い希望があるのを排して健康福祉館のための敷地を万博協会は保持してきたが、これ以上は全くむづかしい事情になってきた。

この期になつては、薬業界を大きく動かす力は、やはり武見日本医師会長の出馬以外にないと大阪地元の

圭刀界の大所は判断した。他方、会長の側近筋からは、先先の気性上厚生大臣より石坂会長へ、そして石坂氏より武見氏へと依頼の形がとれなければ無理であろうと忠告された。

しかし、厚生大臣にあうことがすでに不調であったことは既述した通りである。5月も末に近づき、ことの成否は別として武見先生に直訴すべきである、という意向がつよくなり、ついにこれを試みたけれども成功しなかった。事ここに至っては万事休すほかなく、菅野副会長に健康福祉館建設を残念の極みであるが、諦めざるを得ないことを具申した。43年6月のことであった。さらに、場所をかえても健康福祉館を、という万博協会側の温かい思いやりの言葉もあったが、どうする術もないと諦めた。

◇…テーマ館の展示に意気込む…◇

以上のように、健康福祉館建設の努力は空しいものになったが、医師にこのような展示を具体的に企画し努力した経緯があったことだけは、ぜひ厚生大臣に伝えるべきである。とする要望が大阪地元の有志からあった。これらの方々のお気持ちにせめてもこたえなければならぬと思い、すでに身分が厚生省から離れていたわたくしは、たとえ数分でも大臣にあって経緯を伝えなければならぬ、と努めた。

機会をえたのは43年8月も末のことであった。案に相違して園田大臣は大変な関心を示めされた。何回か秘書官が伝えてくる面会者を退けて、一時間近く事情を傾聴され、なんとか実現できないものか、と熱誠溢れるものを感じた。

湯沢科学参事官にはつよく実現に努力するよう申付けられたが、わたくしはその不可能なことを百も承知していたので、彼の苦衷を察した。とにかく、厚生大臣の意のあるところを万博協会に伝え、万に一つの解決の道を求めることを約した。

万博協会としては、協会が設営するテーマ館以外にはこのような展示を開く道はないが、テーマ館の展示内容は岡本太郎画伯に一任することで引受けてもらっているのだから、先生の諒解をとりつけられなければ不可能である。すでに100%のプランができて積算段階にはいっているのだから、たとえ賛同をえても全く困難なことであろうとのことであった。

テーマ課長広瀬智生氏は健康福祉に対する構想に大変共鳴してくれた。その理解と励ましによって、自信は全くなかったが、わたくしも多少絵をかくので芸術家の心中もわかる、という気持ちから、諒解をとりつける努力を試みた。

案ずるより生むはやすし、とは後日の感であるが、まず小松左京氏の賛同を得、そのとりなしで未来の部の世界セクションの一壁面を、というような話になった。やがて、その主管である川添登先生と展示内容について率直に話し合えるようになった。

数回会合するうちに、わたくしたちの考え方こそ、日本の万博には欠くことのできない課題であり、展示である、という点で意気統合し、世界セクション全部をこのような主張で切盛りして行こう、というところまで話が進展した。もっと早くお互いを知りあっていたら、テーマ館全体としてもかなり、この考え方に副うことができたのだが、と残念がってもらうほどにもなった。それだけに、小会場であるが、エッセンスを



最も効果的に表出したい、と意気込んでいる。

このように述べてくると、ここで健康福祉出展問題は大円団を告げたように思えるかも知れない。しかし、会場が極めて小さく、その上いろいろな制約をうけて表出が難しいので、与えられたスペースを最大限に活かすにはかねて用意している予算だけではどうにもならないことはお察しいただるであろう。

今日、冒頭に述べたように園田元厚生大臣を会長として、健康展示強化のための浄財をもとめて、大阪の有志が奔走中という次第であるが、2000万という金額をこの期にいたって捜すことがまたなかなかの難問ではないかと憂えている。最後まで頑張り通せと皆様のご鞭撻が待たれることである。

終りに臨み、このような率直な裏話をしたことの責は当然筆者にあることを申添える。そして、起伏をつづけた健康福祉展示行なので実に多くの方々のご好意をうけることになったが、これらの方々はこの紙上を借りて心からお礼を申上げる次第である。

(大阪医科大学教授、京大老人科、国立公衆衛生院講師、日本WHO協会常務理事)